「ブッダ的省察」のための資料：デカルトの『省察』『方法序説』 令和４年３月作成

◎デカルト［1596 - 1650］著『省察（**Meditationes**）』（中公クラシックス、井上・森訳）

**１．すべてをこそぎくつがえし、**

**のからたにはじめなくてはならない。**

**２．はにこのをしてみとどまろう。**

**３．うかうかしているとは、ふだんのにひきもどされてしまう。**

①　すでに何年も前に、私はこう気づいていた――まだ年少のころに私は、**どれほど多くの偽**（ぎ）**であるものを、真**（しん）**であるとして受け入れてきたことか、また、その後、私がそれらのうえに築きあげてきたものは、どれもみな、なんと疑わしいものであるか**、したがって、もし私が学問においていつか**堅固**（けんご）**でゆるぎのないものをうちたてようと欲するなら、一生に一度は、**

**②　すべてを根こそぎくつがえし、最初の土台から新たにはじめなくてはならない**、と。

③　**いまこそ私は、真剣にかつ自由に、**私の以前の意見を全面的にくつがえす仕事にうちこもうと思う。…

④　しかしながら、このことに気がついただけではまだ十分ではなく、いつも念頭におくように心がけなくてはならない。というのは、**いつもの意見がたえず舞いもどってきて、いわば長い間の習慣と親しみの絆とによってこれらの意見にしばりつけられているところの、私の信じやすい心を、ほとんど私の意に反してさえも、占領してしまう**からである。…

⑤　**私は頑強にこの省察を堅持して踏みとどまろう**。

⑥　**うかうかしていると私は、ふだんの生活態度にひきもどされてしまう**。

⑦　それはちょうど、たまたま**夢の中で空想上の自由をたのしんでいた囚人が、あとになって自分は眠っているのではないかと疑いはじめるとき、よび起こされるのを恐れて、ゆっくりと快い幻想にふけろうとするようなもの**である。

⑧　こうして私は、おのずと**古い意見**の中にはまりこみ、目ざめることを不安がるのである。**安楽な休息のあとに苦労の多い覚醒がつづき**、しかもこれからは、**光の中**においてではなく、かえって、いましがた提起されたさまざまな難問という、**脱けだしがたい暗闇**（くらやみ）**の中で過ごさなくてはならなくなりはせぬか**と危惧（きぐ）して。

◎デカルト著『方法序説』（ちくま学芸文庫、山田弘明訳）

　[第一格率]

⑨　人がいま住んでいる家を建て直そうとする場合、あらかじめそれを取り壊して資材や建築家を手配したり、あるいは自分自身で建築術を習得し、そのうえで設計図を念入りに描いた、というだけでは十分ではない。建築の仕事をしている間にも快適に住める何か別の家を準備しなければならない。

⑩　それと同じように、理性が判断において非決定であれと命ずる間も、私が行為においては非決定にとどまることのないように、そしてそのときからやはりできるかぎり幸福に生きられるように、私は暫定的にある道徳を自分に定めた。それはただ三、四の格率からなっているだけだが、それをぜひ読者に伝えたいと思う。

⑪ 　第一の格率は、私の**国の法律と習慣とに従うこと**であった。そのさい、神の恵みによって子供の頃から教えられた宗教をつねに持ち続け、その他のすべての点では、私が共に生きなければならない人たちのうちで、最も良識ある人たちが実際に広く受け入れている、最も穏健で極端から遠い意見に従って自分を導くのである。

⑫　というのも、その当時から私は自分自身の意見をすべて再吟味したいと思い、それらを無価値だとみなしはじめていたので、**最も良識ある人たちの意見に従うのに越したことはない**、と確信していたからである。

[第二格率]

⑬　私の第二の格率は、**私の行動において、なしうるかぎり確固として果断であること**であり、どんな疑わしい意見でも、いったんそうと決めた以上は、それがきわめて確実である場合に劣らず、毅然としてそれに従うことである。

⑭　**この点で私は旅人にならった**のである。

⑮　旅人がどこかの森で道に迷った場合、かれらはあちらへ行ったりこちらへ行ったり、ぐるぐる回ってさまようべきではないし、ましてや一つの場所にとどまるべきでもない。

⑯　むしろ、いつも一つの同じ方向へできるだけまっすぐに歩き続けるべきであって、たとえその方向をとるように決めたのは最初は単なる偶然であったとしても、軽々しい理由でそれを変えるべきではない。

⑰　というのも、こういう仕方で、かれらはちょうど望む場所に出ることはないにしても、少なくとも最後にはどこかにたどり着き、それは森の真ん中にいるよりもおそらくよいはずであるからである。

⑱　それと同じように、実生活での行為はしばしばどんな猶予も許さないのであるから、次のことはきわめて確実な真理である。すなわち、**どれが最も真なる意見かを見分けることがわれわれにできないときは、最も蓋然性**（がいぜんせい）**の高い意見に従うべきであること**。

⑲　そしてまた、たとえどの意見により高い蓋然性があるのかが分からない場合でも、やはりどれかに決めるべきであること。

⑳　そして決めたあとでは、それが実践に関するかぎりは、もはや疑わしいものとみなすべきではなく、われわれにそう決めさせた理由は真で確実であるのだから、それをきわめて真で確実なものとみなすべきであること、である。

㉑　そして**このことによって、以後、私はあらゆる後悔や悔恨から自由になることができた**のである。

㉑’「後悔と悔恨」の注：　『情念論』に定義がなされている。デカルトの主張する「決断(la résolution)」や「決定(la détermination)」は、このような情念を駆逐するものである。

㉒　この二つは、弱く動かされやすい精神の持ち主の良心をいつもかき乱し、かれらはあるものごとを善いと思って気まぐれに実行してしまい、後になってそれを悪かったと判断するのである。

 [ 第三格率]

㉓　私の第三の格率は、**運命よりも自分に打ちかつよう**、そして**世界の秩序よりも自分の欲望を変えるよう、つねに努める**ことであった。

㉔　そして、一般的に言えば、完全にわれわれの能力の範囲内にあるものはわれわれの思考しかないと考え、したがってわれわれの**外なるものに関しては、最善をなした後でもうまくいかないことはすべて、われわれにとって絶対的に不可能である、と考える習慣をつける**ことであった。

㉕　ずっと前から気づいていたことだが、**実生活においては**きわめて不確実だと分かっている意見でも、あたかもそれが疑いえないものであるかのように、ときとしてそれに従わなければならないことがあるのは、前にも述べたとおりである。

㉖　しかし当時の私は、**ただ真理の探求のみに専心したいと思っていたので、それと正反対のことをしなければならない**と考えた。

㉗　そして、ほんの少しの疑いでもかけうるものはすべて、絶対に偽なるものとして投げ捨て、かくしてそのあとにまったく疑いえない何かが、私の信念のなかに残りはしないかどうかを見なければならない、と考えた。

㉘　そこで、われわれの**感覚はときとしてわれわれを欺く**がゆえに、感覚がわれわれに想像させるようなものは現実には何も存在しないと想定しようとした。…

㉙　このようにすべてを偽であると考えようとしている間も、**そう考えているこの私は必然的に何ものかでなければならないことに気がついた。そして、「私は考える、ゆえに私はある」というこの真理はたいそう堅固で確実**であって、懐疑論者のどんな法外な想定をもってしても揺るがしえないと認めたので、私はこの真理を私が求めていた哲学の第一原理として、ためらうことなく受け取ることができると判断した。